大館市史編さん調査資料

第 2 集

北秋田郡田代町山田字柏木岱

縄文期竪穴群
続縄文期配石土坑

昭和46年10月

大館市史編さん委員会

歴
43

北秋田郡田代町山田字柏木岱

縄文期
竪穴群

続縄文期
配石土坑

昭和46年10月

目　次

緒　文 …… 1
遺跡の位置と地形 …… 2
発掘調査 …… 3
　Ⅰ　竪穴住居址群 …… 4
　Ⅱ　土　坑　墓 …… 6
　Ⅲ　配石土坑群 …… 7
　Ⅳ　出土遺物 …… 9
　　1　土　　器 …… 9
　　2　石　　器 …… 15
考　察 …… 17
総　括 …… 18

図・図版

第1図　遺跡位置図 …… 2
第2図　トレンチ配置図 …… 3
第3図　竪穴住居址群実測図 …… 5
第4図　土坑墓実測図 …… 7
第5図　配石土坑群平面図 …… 8
第6図(1)　竪穴住居址内出土土器 …… 10
　〃　(2)　竪穴住居址内出土土器 …… 11
　〃　(3)　土　製　品 …… 12
　〃　(4)　第1号ピット出土続縄文式土器 …… 13
　〃　(5)　配石土坑区域出土土器 …… 14
　〃　(6)　竪穴住居址出土石器，石製品 …… 16
　〃　(7)　土坑墓副葬の扁平片刃石斧 …… 6
図版1　土　坑　墓 …… 19
図版2　竪　穴　群 …… 24
図版3　　〃 …… 21
図版4　　〃 …… 22

緒　　文

大館市内で縄文期竪穴が学術調査されたことはない。ここに報告する竪穴は，大館市の西辺鳴滝から市境界を距て約 500 m ほど北の北秋田郡田代町山田字柏木岱遺跡の発掘によるものであるが，大館市史編さんの調査が開始されてからの発掘であり，市域と近距離にあるため，その資料に加えても差支えない。

調査は昭和46年 4 ～ 5 月の境と 8 月猛暑中に行われた。遺跡はかなり広い未発掘部分を残すが，ひとまず今年度分としてその概要を報告する。

この遺跡は遠からず土木業者の土取りのためその姿を消すであろうが，更に追加発掘するに足る価値をもつ遺跡であることを指摘しておく。

発掘を許諾された土地所有者の藤島礼二氏に厚く御礼申し上げる。

（大館市史編さん委員　奥山　潤）

遺跡の位置と地形〔第1図〕

大館市の中心から国道7号線を西へ約6kmで北秋田郡田代町川口である。奥羽本線下川沿駅がある。川口から田代町山田に通じる道路を北に1.8km，柏木・保滝沢に至る道路の分岐点（バス停）の北東150mの台地端が遺跡位置である。道路よりの比高約10m，分岐点の標高は50mである。台地北東と南西の谷には細い川が西流し山田川と台地の南西至近の地点で合流して南下，米代川に合流する。

台地を構成する地質は十和田火砕流で，山田小学校北部でその端部が第3紀層を不整合におうのが見られる。遺物から考え，付近の現地形の基本はほぼ縄文晩期末に完成したものである。

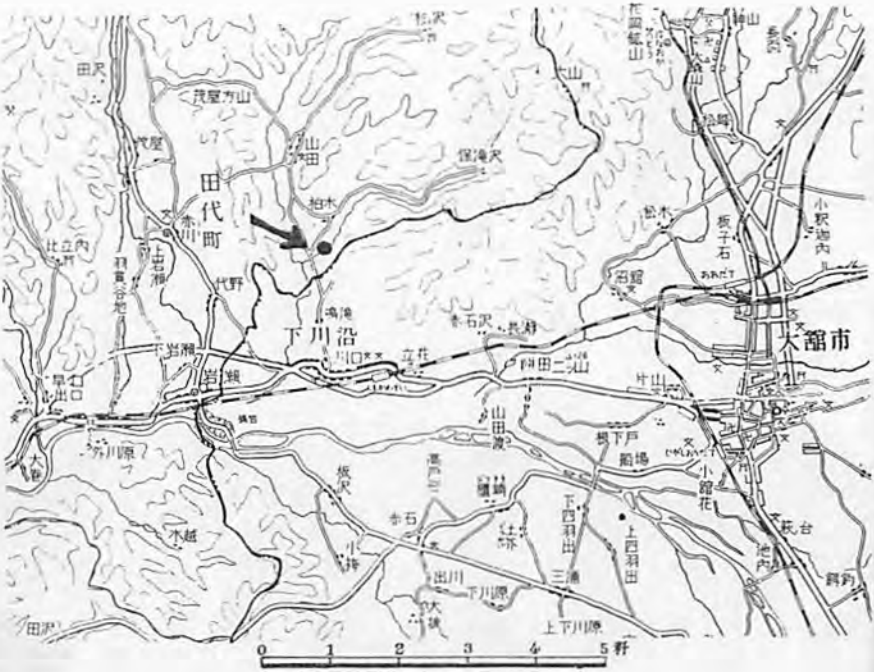


Fig 1 遺跡位置図

発 掘 調 査〔第2図〕

この台地の上表は農業用に黒土を剥土したあとの，腐植土の発達が充分でない縄文期文化面が露出していた。地表に遺物の散布は見られなかったが，剥土のためブルドーザーが昇降したルートがあり，その縁端に竪穴住居址の落込みが見られた。この部分と剥土された台地の一部に数本のトレンチを入れた。

トレンチ発掘は5月期間中で一旦終了したが，竪穴は5月中ほぼ完掘1戸を更に四方に拡張発掘し他の竪穴を検出した。5月中のトレンチ発掘で頭骨を保存する土坑墓と，組石を伴なう，多くの不定形ピットを発見した。順序は不同であるが，これら遺構につき記載しておく。

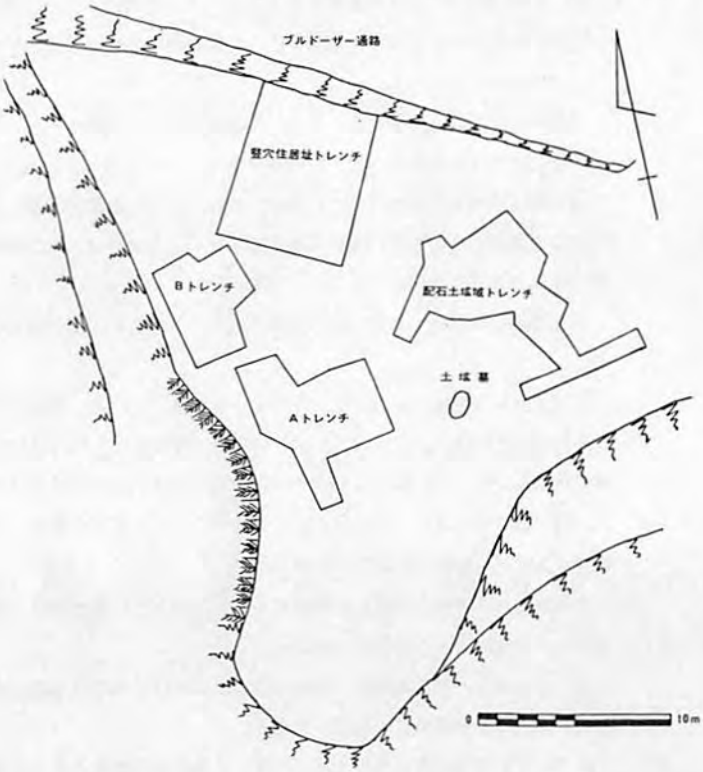


Fig 2　トレンチ配置図

Ⅰ　竪穴住居址群〔第３図・図版１～４〕

第３図のように２戸のほゞ完全な竪穴のほか，他の竪穴と思われる遺構４戸の一部を発掘した．ほぼ５ｍ×９ｍのグリット内に出土した竪穴を６区にわけて説明する。

Ⅰ　ブルの昇降路の縁部に見られた落込みである。ブルによって切断された落込みの截断面は約3.5ｍを計測，８本ほどの柱穴状ピットを検出した。柱穴は深さ40～30cmのもの３本，17～20cmほどのもの４本，10cmのもの１本。東側に土器片が出土したが編年位置の判定できるものは１片だけである。

東側にさらに15～20cmの深さのピットや柱穴がのちの拡張で出現したが，別の施設に属するらしい。但しⅠ区と同一面である。

Ⅱ　南西方向にこの面を拡張したところ，Ⅰ区床面の同一面に黒土（小角礫を混在）する部分が円型に出現した。この面を拡張すると径50cmの円型焼土（炉）が出現。拡張面では柱穴状ピットは全く出現しなかった。

土器片の出土は全く少なかったが，生活面であると判断された。この黒土を除去したところ約15cm下に，粘土の貼床あるほゞ楕円形プランの径５ｍ×3.5ｍの竪穴が検出された。

なお先に出現した焼土は厚さ15cmで，新たに出現した竪穴床面に達する厚さを示していた。もしもこの囲石のない炉が，竪穴床面に属しているとすれば，この炉焼土の周域の黒色土は，単に竪穴中に自然的に堆積したものにすぎない。

出土遺物は少なかったが，炉の東側に接して，床面に１個の凹石が発見されたことは注目された。

柱穴は大きい直径のものはなかったが，やや深いものが，周壁に分布する特色が見られる。

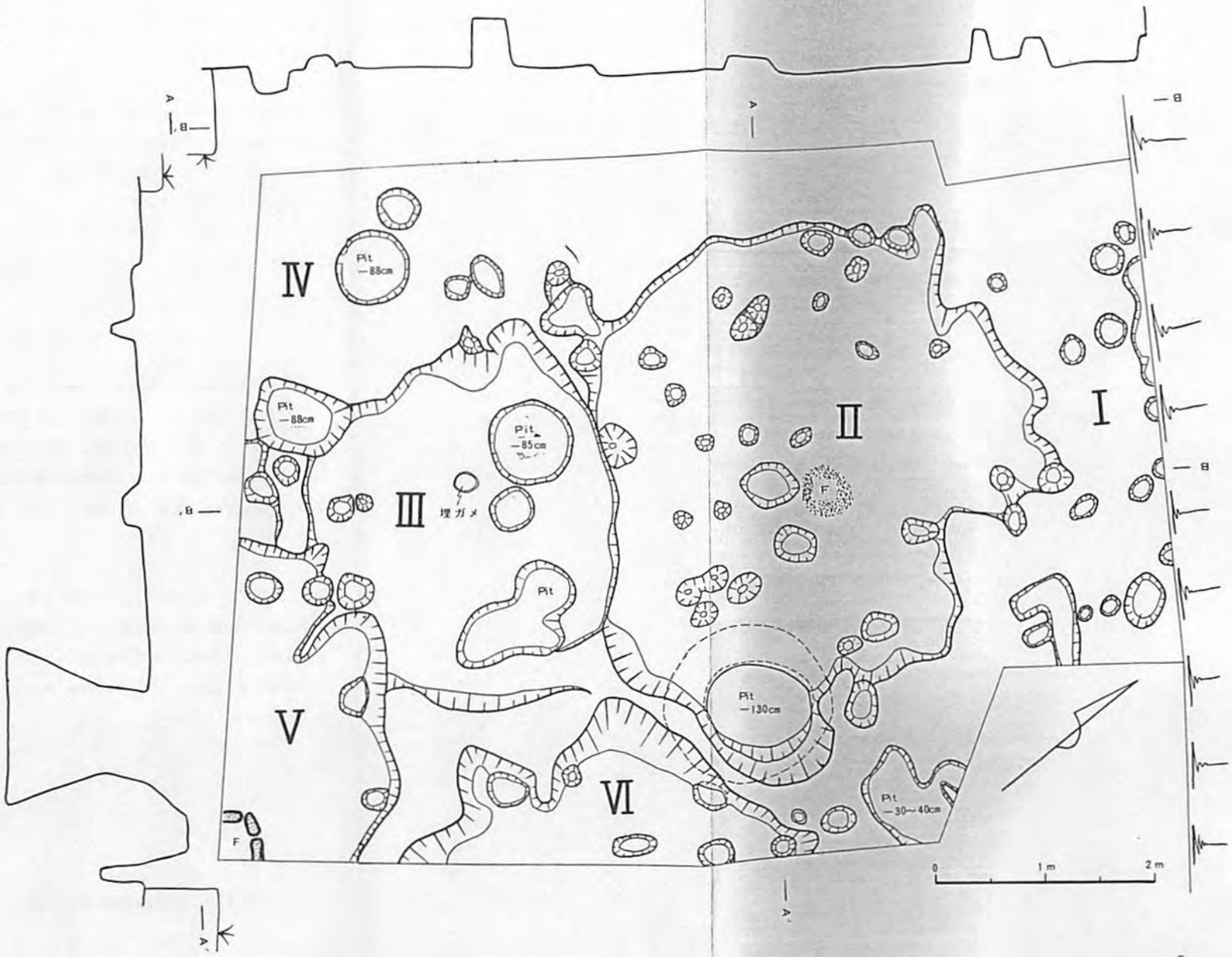
炉の東南端に柱穴より大きいピットが出現，開口面から15cmほど下ったレベルに棒状の河原石数個が竝んでいたが，第２次発掘で拡張精査の結果，このピットは深いコルベン状ピットと判った。開口部の径0.8ｍ，開口面から0.65ｍの深さから下方に開き，深さ1.3ｍで底面に達し，底面は1.5ｍ×1.4ｍの円型プランである。

明らかにこの竪穴に所属した施設であり，このように竪穴内に，性格不明な点の多いコルベン型ピットが発見されたことは興味深い。

Ⅲ　この竪穴の南西周縁が一部他の竪穴に切り込まれている様に観察されたので，南西に拡張した。同時に東西両側にも拡張を試みた。

ここにも小角礫混在の黒色土層が出現，小量の遺物のあるその面を掘下げ，径３ｍほどの不正円型の竪穴が出現した。この竪穴内に深さ38cmほどのひょうたん型ピットの他，口径70cm，深さ85cmの直円筒型のピットが出現した。柱穴状ピットは４本であるが，直円筒型ピットとその近く

Fig 3　竪穴住居址群実測図



の径40cm，深さ45cmの柱穴状ピットの傍らに，径20cm，深さ16cmほどの，埋甕（3突起ある深鉢）のある小ピットが発見されたことも注目された。

なおこの竪穴の上部生活面からは2個処に焼土が発見されている。

Ⅳ　この西南，Ⅱ竪穴のものよりは高いレベルで径はや・小さいが，深さ85cmの直円筒型ピットが発見された。ほかに径60×40cm，深さ30cmのピット，数体の柱穴状ピットが発掘された。

Ⅴ　Ⅱ号竪穴の南側には，周壁近く3本ほどの柱穴状ピットのほか，石囲炉の一部が発見された。またこのⅤ号竪穴とⅡ号竪穴の境に，完全に復原できないが厚手大型の円筒上層式深鉢の上半部の大片が数個発見された。

Ⅵ　このⅡ，Ⅲ，Ⅴ竪穴の東に第6号の竪穴と思われる施設が検出されたが，期日の関係から拡張に至らずに中止した。6本ばかりの柱穴状ピットが発見されている。

Ⅱ　土　坑　墓〔第4図〕

段丘舌状部東側に近く原地表下30cmほどの黒土層直下に，楕円型の粘土蓋をした墓坑らしいピットが単独で発見された。楕円型ピット上面の南半部には粘土蓋が欠けていたが，その黒土部分を掘りさげると，頸推が数個出現し，続いて粘土の下部，ピット底に欠失部分が多いが頭蓋の一部らしい骨格が出現した。出土遺骨は人骨と判断されたが頭骨は小型であり，歯骨の一部も見られた。一夜そのま・放置，翌日取上げのためピットを長軸方向に切断して取上げ，土中からは歯の多くを選別できた。歯も小さく，おそらく小児骨と考えられる。

また頭骨からわずかはずれ，ピット中段に小型の磨製石斧1個がおかれ，副葬品と判断された。頭骨，頸骨以外の四肢骨等は発見されていない。骨格については札幌医大第2解剖学教室の人類学者三橋公平教授の御快諾を得て目下，復原研究中である。

第4図にこの土坑墓の実測図を掲げた。ピットは長径85cm，短径40cm，深さ40cmで，長軸方向は北東である。副葬石斧の深度は30cmであった。

Fig 6(7)　土坑墓副葬の扁平片刃石斧

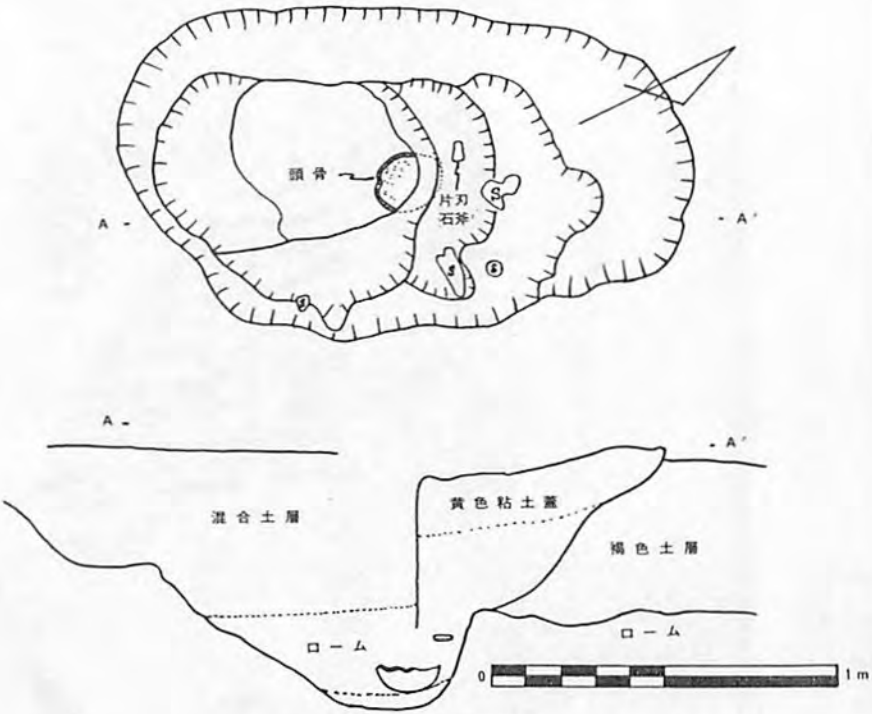


Fig 4　土坑墓実測図

Ⅲ　配石土坑群〔第5図〕

竪穴群より東南15mを距ててCトレンチを設定，次第に追跡して，中央から北に掘り進み，配石遺構を発見した。この区域をDトレンチとすれば，主としてその東北側に配石が見られ，その周辺に密接して不定形のピットが7基発掘された。

遺物のまとまったものは少なく，いずれもピット開口部の縁などに，点々と縄文後期土器の小片があっただけで，その出土状況からみて，特別に意義あるものは見られなかった。

例外として1号と名付けたピットからは，図示したような続縄文期土器の甕の口縁部，胴上部のや、まとまる片が発掘され，それは故意にこわされた断口を示していた。

配石は放射状または環状でなく，平面的ではあるが，一種の積石と見なされる。

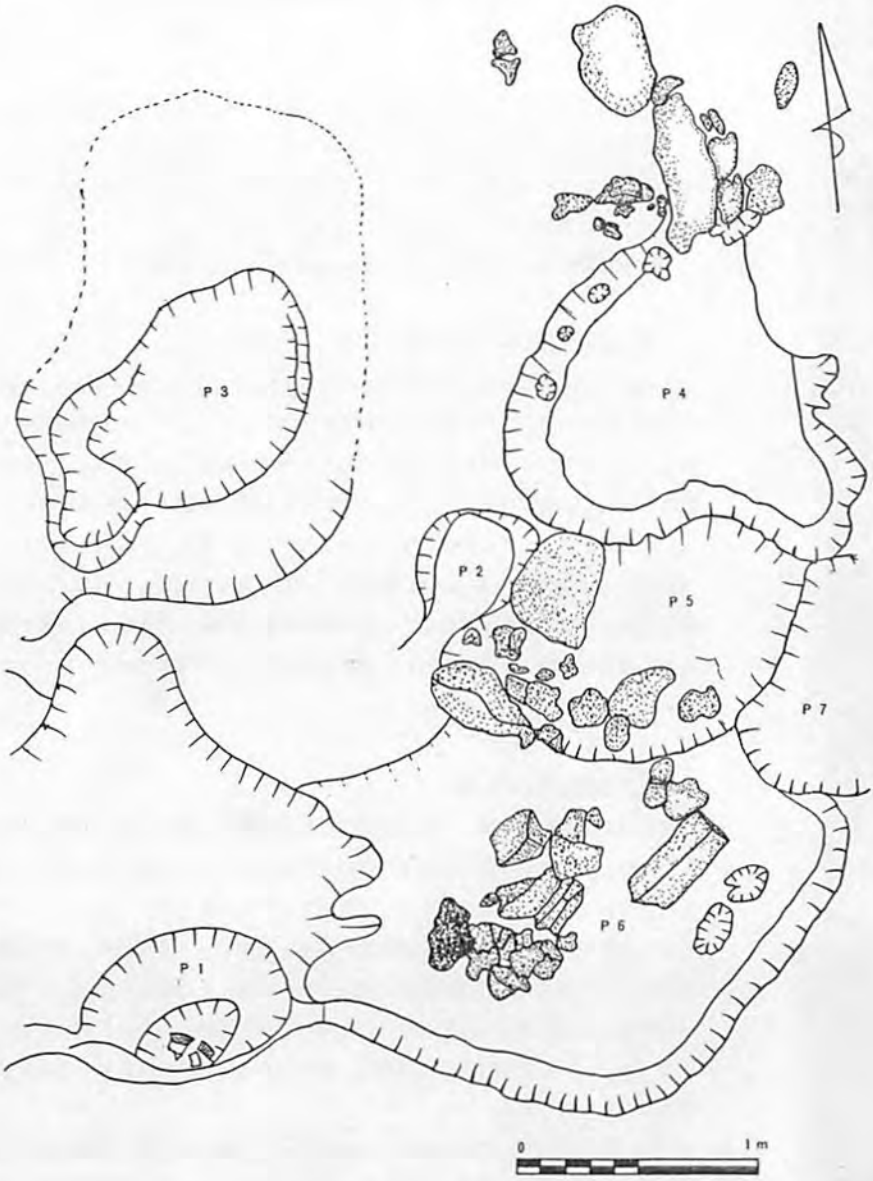


Fig 5　配石土坑群平面図

Ⅳ 出土遺物〔第6図(1)~(7)〕

1 土　　器

A，B両トレンチ〔第2図参照〕の出土遺物は省略するが，土器の包含は削剥された地表下（原地表は約30cmほどの表土におゝわれていたものと思われる）23cm，30cm，39cm，58cmの4層位から出土している。更に上に1～2層の包含層があったものと推定される。

これらの土器はいずれも縄文中期末と考えられる。

竪穴群発掘の際上層から出土した遺物破片は第6図(2)の拓影で示したものである。

A　竪穴床面出土土器〔第6図(1)1，2〕

第6図(1)1は第3号竪穴の南東壁際の出土。円筒形の大型深鉢である。口縁部に連続山形文を粘土細紐を貼りつけて飾り，胴部は縦の粘土紐で四分割し，その間を横位の粘土紐貼付文で飾っている。またおそらく1対または2対であろうが，口縁部を粘土紐による円形貼付文で飾る。粘土紐貼付文上には縄文の施文はない。したがって貼付文装飾は，縄文施文後に施文されたものである。胴下部を欠失，口径28cm，厚さ2cm，現高22cm，胎土には砂粒を混在する。

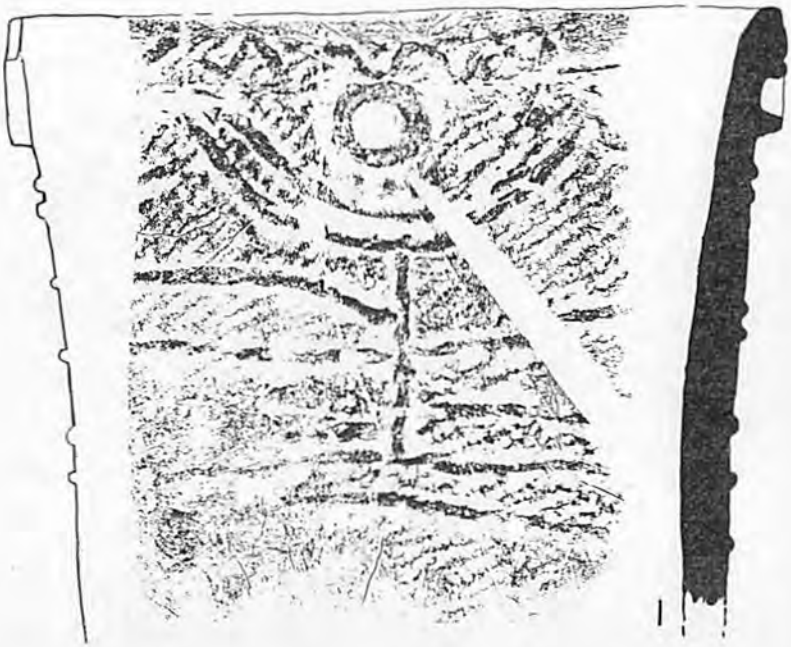
第6図(1)2は埋甕である。本来口縁周を4分割した4突起をもつべきであるが，この土器は3突起らしい。突起部先端は欠失しているが外側に貼付の粘土瘤を飾る。外反する口縁部は無文であるが，折返し口縁には間隔をおいて撚糸文を押圧。頸部以下は縄文を施文している。口径18cm，高さ18cm，底径8cmである。

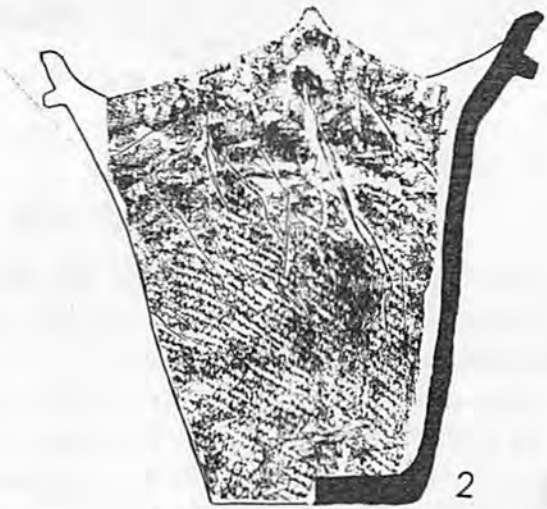
B　竪穴住居址内出土土器

第6図(2)の拓影は，第1～第6竪穴住居址区の竪穴を埋め，炉（石囲のない）址を数地点に残していた上位生活面と比較的床面に近い居住から出土した土器であるが，その出土状況は，数グループにわかれて小区域にまとまって発見されたものが多い。

1～13の各片は第2号竪穴住居址のコルベン型のピットを埋めた土の上位部，即ちピット開口部よりわずか下位に，数個の長い川原石が並べられ，その直下に出土した土器で，14～17は，5月の発掘に引続き8月に第2号竪穴住居址の南縁を追跡した際に，残存していた上位生活面中の出土である。この第2号竪穴住居址は，5月に検出排土中には，全くと言えるほど遺物の出土を見なかったものである。

1～13の土器の中，縄文の地文に沈線文をもつ土器には，2，8を除いて，磨消縄文の手法が見られる。他に無文に沈線による直線文のある土器（3～7）が見られる。床面上層位の土器にもほゞ同じ手法が見られる。





0 10cm

Fig 6(1) 竪穴住居址内出土土器

Fig 6(2) 竪穴住居址出土土器

どちらかと言えばこれだけの中では，14以下が13以上よりも上層位の土器であろう。

18～27は第３号竪穴住居址にあった，上位生活面の炉（焼土）中に発見された土器片の一部である。最も個数の多かったのは23，24の類に同一個体に属する土器であった。焼土の成立はこれらの土器と，同一期ないしそれ以前であることを物語っていると言えよう。

これらの中で磨消縄文手法を示すものは，１個だけで（18）無文の地文に平行沈線文を施文したもののほか，19～22のように縄文地に太い沈線で曲線文を描いたものと，無文の地に直線的沈線文と上部に竹管による爪形文を施文した１片（25）がある。

21以下の各土器も，第３号竪穴住居址ほかを発掘していく過程で出土したもので，たとえば31，32は第４号竪穴住居址の床面上10cmほどの層位の出土である。

これらの土器は，せまい範囲内に互に切込まれた竪穴住居址域の出土であるから，自然的な編年的層序を示す明白な資料とはしがたいが，全体的に互に隔離した編年位置を示すものではない。従っておよその竪穴住居成立の時期を示すものとして，取扱って差支えないであろう。

C　土　製　品

第４号竪穴住居址の上層位から，第６図(3)に示した土製品が出土している。左は当地方に多いキノコ型の土製品である。

右はおそらく板状の土偶の破片と考えられる。両面に竹管による刺突文があり，下部ちかくには３個の貫通孔が並んでいる。

Fig 6(3) 土　製　品

D　配石土坑内出土土器

第６図(4)は配石土坑群の第１号ピット中から出土した土器である。椀形の高い口縁部は，口縁端と内側に縄文があり，頸部以上にも施文が見られる。くびれの部分で割れていたものを復原した。拓影では判りにくいが，頸部のくびれに一種の綾絡文が見られ，内弯する口縁部に特異な縄文が見られる。

この施文は，短かい細棒先端に撚縄を結び，ついで細棒にからませた縄の他の一端を，細棒の先で差しとめた原体を横方向に回転した一種の撚糸文と考えられる。体部にもその結び目の回転文が見られ，撚糸文部分は磨消してある。

かめ型土器で口径22cm，厚さ５mm，現高13cmである。胎土に砂粒を混在し，焼成やゝ良好で，口縁部には炭質物が残留し，しかも甚だ軟かく手に付着する。

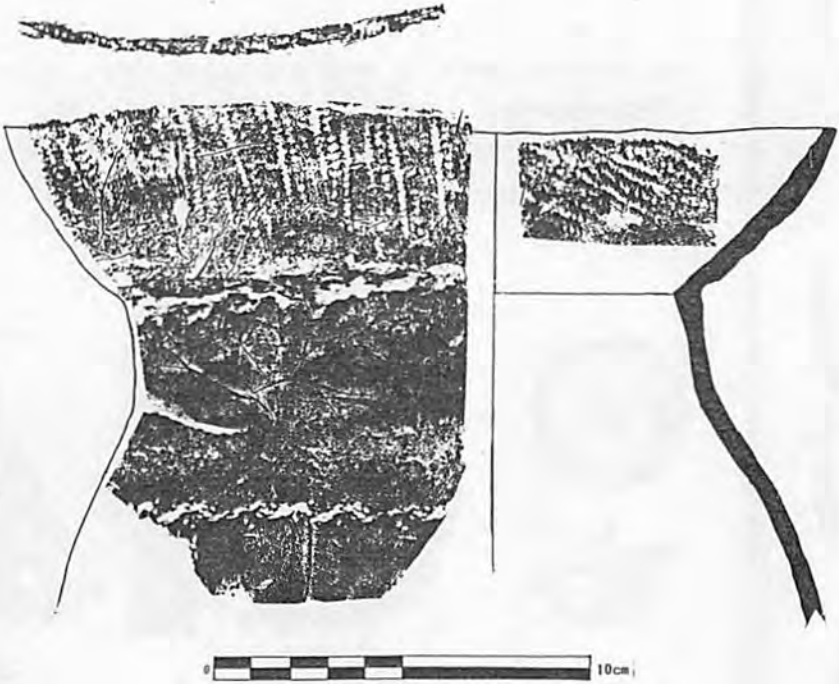


Fig 6(4) 第１号ピット出土続縄文式土器

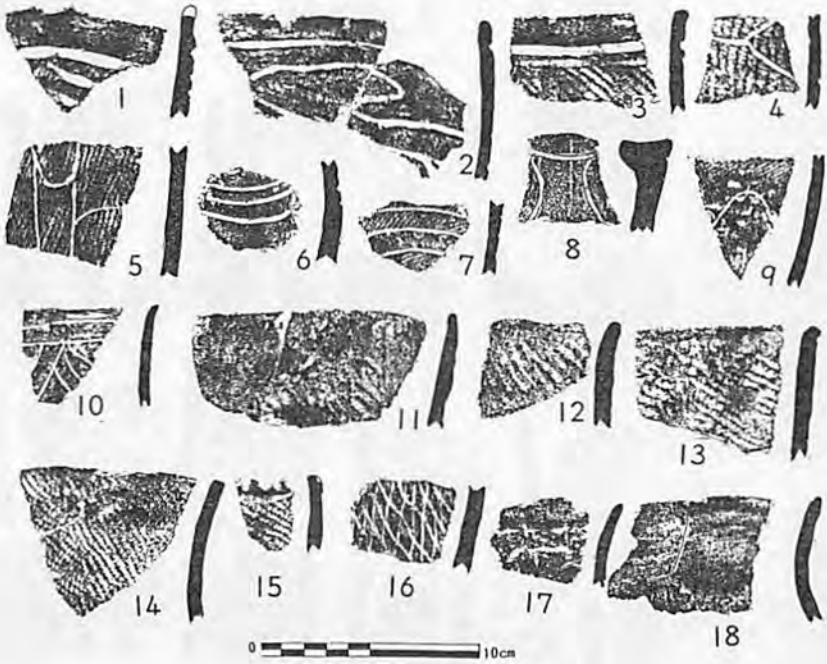


Fig 6(5) 配石土坑区域出土土器

E　配石土坑区出土土器

前述のように，竪穴住居址群の東側に発見された配石土坑の密集した一角では，土坑内の遺物出土は少なく，第6図(5)の拓影で示した土器片ですべてである。

土器は一期間に属するものではないが，これらは土坑内から出土したものはほとんどなく，土坑の縁のあたりに発見され，もともとこの期土器の散布区域に土坑が掘られた際に，土層の撹乱によりさらに混在したものと認められた。

器型によっても異るが，大体太目の縄文を地文とし，太い沈線文のある土器と，細い縄文を地文に，細い沈線で直線または曲線文を施文した土器と，縄文だけの土器，ないしは無文土器に分類されるが，第6図(5)18の無文土器は縄文式土器ではない。以下簡単に説明する。

1は口縁に1対の小さい山形突起をもち，口縁部は縄文を磨消しているが，以下単節の左斜縄文を地文とし，浅いが太目の沈線文により口縁に平行線と山形文らしい沈線を画いた土器で，胎土に細かい砂粒をまぜ，橙黄色を呈する。

2は沈線による曲線文を口縁に平行な沈線文以下に施文した土器で，胎土にわずか砂粒を含みほゞ1と同質同色である。

5はよく整型された器面に細い縄文を地文として平行沈線及び上下対称の曲線文を施文した土器で，堅く厚い。1とは厚さが異るがほゞ同じ手法と考えられる。

6は無縄文で3本の平行沈線を画いた部分であるが，文様の構成は不明である。

7～9の3個は磨消縄文の手法がとられ，細かい縄文の地に細い沈線文を画き，沈線区画内の一方の縄文を磨消している。8は3個ないし4個の突起をもつ鉢の突起先端で，頂部は丸くくぼみ，裏側もえぐったように作られている。10も磨消縄文らしいがはっきりわからない。うすく，細いシャープな平行沈線による直線文と，一本の曲線文による文様を構成している。

11は，胎土の色は1，2と似ているが，それにはない小岩片を含み，異質で，拓影の右側半分には口縁にほぼ垂直にヘラまたは指によりなでおろした平行な痕跡があり，以下の左斜めの縄文のように見える文様はや・粗い器面のため不確実ではあるが，縄文でなく棒状の工具による押圧ないし引掻き痕で，これは或いは第6(4)図の土器に類する形の土器口縁部であろう。従ってむしろ時期的に18などに接近するかもしれない。

14は短かい細い縄文を施文，口端にも縄文を施文している。15はせまい幅の口縁部に間をおいて丸棒状工具による刻みを施し，16は撚糸による格子状文である。

17，18は無文で，17は胎土に砂粒なく無文の縄文式土器と考えられるが，18は粗い砂粒をまばらに混在し，器表に細い刷毛目文らしい擦過文が見られ，裏面には左斜めのヘラによる調整文が見られる。

以上の土器は時期的に大別して11，12，14を一期のものとし，18は更に新らしい種類で，縄文式ではなく他のすべて縄文式とで3期に区別することができるであろう。

2　石　　器

ここでは竪穴住居址の出現したトレンチ内出土の石器を主に記載する。

A　竪穴住居址の出土石器，石製品

第6図6は竪穴住居址の床面及び竪穴を埋め焼土(炉)を残した上層居住面出土の石器である。細密な加工を示す石器は少なく，一般に簡素である。原石材は河礫らしく，岩脈から採集した原材を用いたものは見当らない。

1は自然面を残し，鋭い縁部に再加工の跡は見られないが一部に使用した部分がある。第5号住居址出土である。2も同竪穴の出土である。5，6，8，10，12はすべて第3号，第5号住居址の上層生活面に発見されたものである。

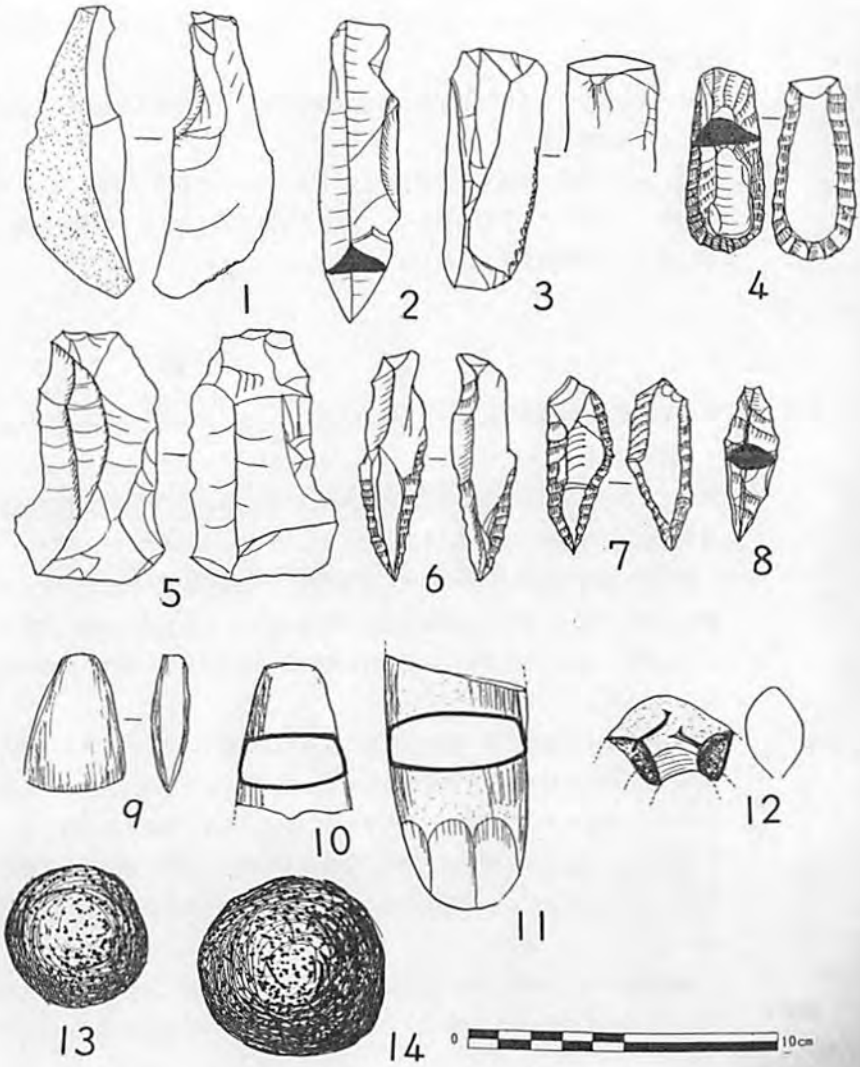


Fig 6(6) 竪穴住居址出土石器，石製品

7，13，14は第２号住居址の東側の袋状ピット内上位部から発見されたもので，13，14は投弾であろう。

９～11は磨製石斧であるが，11は扁平な河原石の先端両面を軽く磨き，刃をつけたものである。

12は自然石を利用したと思われる石製品で中央に穴がありこの部分と，環状の部分に何か深い線刻がある。おそらく垂飾であろう。

この他石製品としては凹石が第２号住居址の炉傍より発見されたほか，石錘が表採されている。

B　土壙墓副葬石斧

第６図(7)・図版１が頭骨を埋葬した土壙墓から出土した石斧である。完全に各面を磨研したものでなく，ところどころ原石面を残してはいるが，刃部に何か黒色物質が付着している。刃は片刃である。淡灰青色を呈し肉眼では岩種不明。

考　　察

柏木岱の台地実端の遺跡は，この概報に掲げた土器だけでなく台下の道路工事で失なわれたあたりには円下ｂ式土器も見られた。今回の発掘では，１～２片の土師器，それに続縄文式土器を除いてはすべて縄文式土器であり，遺物から竪穴住居址はこの縄文時代の中期末から後期初頭に属するものと理解して大過ないものと考える。

竪穴住居址内の床面に確実に出土した埋甕は，その竪穴住居の時代を示すものである。この土器は大木式に属し，他の大型土器は円筒上層式に属し，これら文化の融合が見られる。発掘域がせまいため，遺物出土の少ない完掘２戸の竪穴住居址について，他との比較からの検討が充分できない点もある。

東側の配石土壙群は，その構造がかなり乱雑で，粗末であるが，これらは墓壙群と考えるのが妥当と思うが初出例で決定しがたい点もある。第１号ピット中から出土した土器は小坂Ｘ式に近いもので，続縄文式土器であり，県内でまだこの期の遺構が発掘された例のない現在，注目すべき発現であった。しかし縁辺部や底部に石組みのあるピットが，続縄文期にまで継続することは注目すべき点であるが，一時期古い縄文晩期の石組とやゝ趣きを異にし，伝統的でない点は興味深い。

頭骨を出土した土壙は，早くから粘土蓋の一端がこわされ，死体の大部分は埋葬直後に動物の餌として食い荒された疑いがある。もと決して頭部だけの埋葬とは考えられない状況を示している。

総　　括

昭和46年５月初旬と８月初旬の２期にわたり，発掘された柏木貸遺跡の一部に於て，ほゞ完全な２戸の竪穴住居と，数戸の竪穴住居の各一部がそれぞれ発見された。竪穴床面の保存は良好であった。

竪穴住居は円型プランで，側溝はない。

完型に近い竪穴の一戸には，その周縁部に深いコルベン型のピット（袋状竪穴）が発見された。また他の竪穴には埋甕１個が発見され，直円筒形の深いピットが検出された。

これら竪穴の炉は石囲いでなく焼土だけであった。また竪穴はおそらく人為的に埋められ，その面は上位生活面である。

竪穴群の開設は円筒上層Ｄ式期の縄文中期末葉から，顕著な磨消縄文手法の発生しない後期の晩期（称名寺式期）にかけて行われ，その後上位に大湯式期土器をもつ縄文後期初頭の文化が営なまれたらしい。

縄文晩期には生活の痕跡なく，居住区の発掘はできなかったが，続縄文期の末頃の文化が営なまれ，その墓址と思われる遺構の一部が検出された。また小児頭骨の発見された土坑墓は，副葬品の扁平片刃石斧から，これも続縄文期のものと判定される可能性が強いが，扁平片刃石斧を弥生文化の一要素であるとすれば，小坂Ｘ式系文化はある程度は弥生的であったことになるかもしれない。弥生式的な石器は数種のものが鹿角郡小坂町で発見されているが，奥羽南部のそれと同様の使用目的をもっていたかどうかには，疑うべき点の多い非実用的なものがある。

本遺跡の南約 500 m，市との境界にそい有名な狐森遺跡[1]がある。その大部分は盗掘により消滅したが縄文晩期の各期の遺物が見られ，南方鳴滝台地には広く先史遺跡が存在する。その一部は学術発掘[2]されている。もちろん骨格の残っている土坑墓も初見である。

本遺跡は縄文中期遺跡として円筒上層Ｂ式土器の出土が知られていたが，今回の調査により縄文後期，続縄文期，古墳期の遺物も発見され，殊に続縄文期のやゝ良好な土器の発見は大館周辺としてははじめて[3]のことであった。

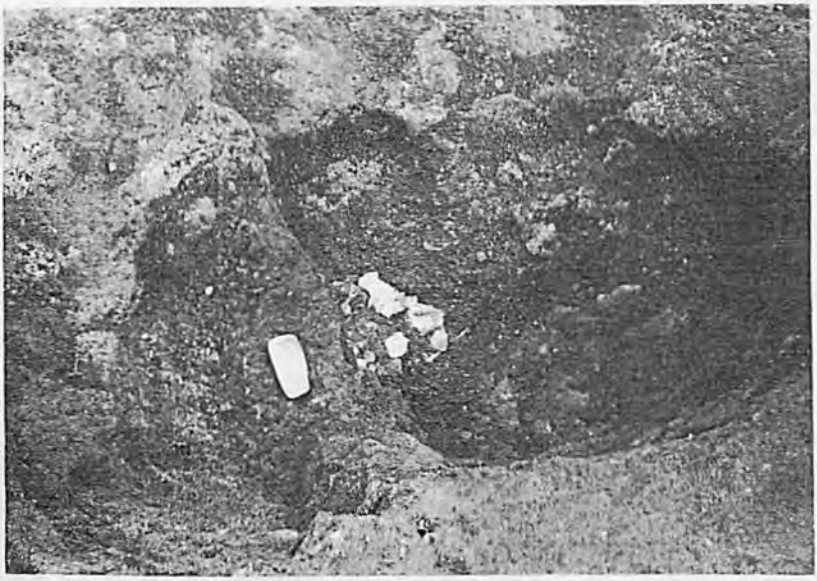
特に西側に連なる茂屋方山の低夷丘陵と，鳴滝の台地，地形的に多くの遺跡，殊に縄文各期にわたる竪穴住居群の存在が推察される立地条件を備えている。

---

(1) 大館鳳鳴高校社会部・桂高校社会部発掘，昭45．５月，土偶（部分）２個体，注口土器完型品を含む数個の完型土器を出した。報告は桂高校より近刊される。

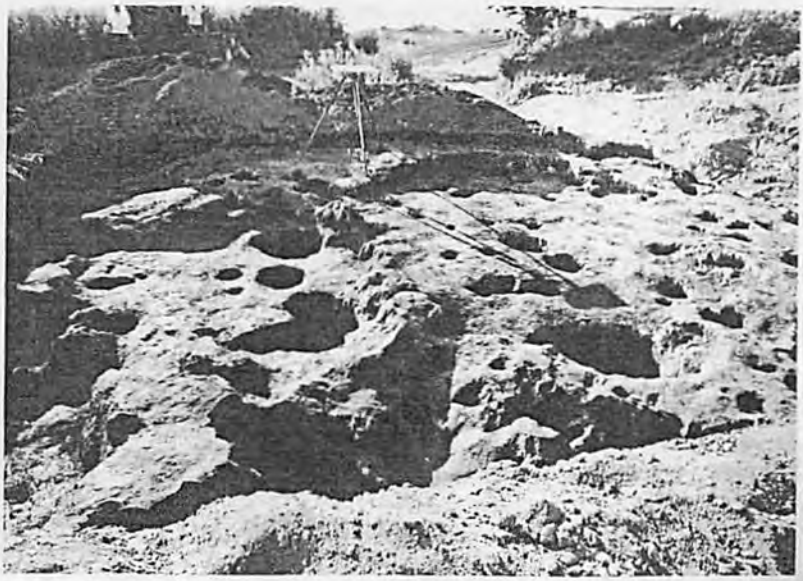
(2) 大館鳳鳴高校社会部発掘　「鳴滝遺跡」

(3) 大館地方での弥生期＝(続縄文式)土器は口縁や体部の小片が山館(小坂Ｘ式)下川沿秋田放送ＴＶ塔(同式)，狐森(型式不詳)の３片が発見されているにすぎない。



PL1 土　坑　墓

(上)　粘土蓋の一端黒土部分を掘りさげ頭骨検出
(下)　土坑切断，副葬石斧が現われる



PL2 竪穴住居址群

(上) 北側より，手前2人の発掘員が立っているところがブルの上る道
(下) 東側より貼床面

PL3 竪穴住居址群

(上) 南側より貼床面
(下) 円上D式土器の出土状況

ＰＬ４　（上）　第Ⅴ号竪穴の石囲炉（部分）
　　（下）　発掘風景

大館市史編さん調査資料
第2集

北秋田郡田代町山田字柏木岱
縄文期竪穴群
続縄文期配石土壙
昭和46年10月

大館市史編さん委員会
印刷　㈲大館孔版社
発行　秋田県大館市企画室気付
大館市史編さん調査資料集刊行会